

報告

表現体としての体験から考える舞踊のコミュニケーション

木村百合子

1 はじめに

この度の課題でお誘いを受け、専門的に、その研究をされていらっしゃる先生方と、この場に同席することに、大きな不安とためらいを感じながらも、参加させていただき決意をいたしました。

今日の課題に入るに当たって、私が主にダンサーとして深く関わった海外生活でのあらましを簡単に申し上げます。

私はモダンダンスで、日本でデビューし、その後、フルブライト留学生としてニューヨークの "Martha Graham School of Contemporary Dance" に所属しました。そしてその "Martha Graham Dance Company" の主役ダンサーとして20数年間、ニューヨークを基盤として、アメリカ国内の公演旅行、世界の国々への公演旅行での舞台生活を経験いたしました。

このような経験の中で、偉大な舞踊家 Martha Graham とのリハーサル過程を振り返りながら、「表現体としての自分自身の体験を基に」本日の課題を考えてみようと思います。

(お断り：誠に無礼と思いますが、これから先は、いつもおよびしていた Martha と呼ばせてください。また、後々出てくる Martha のサインも、短いのでそのまま英語で進めさせていただきます。)

2 リハーサルでの体験を基に

作品リハーサルには、すでに出来ているレパトリー作品と、これから創り上げようとする新作があり、今日はその両方から一つずつの体験を取り上げてみようと思います。

(1) レパトリー作品の立ち上げ方

まず、レパトリー作品での体験をお話する前に、私たちのレパトリー作品の立ち上げ方を説明させていただきます。

主に主役ダンサーの作業過程は、新しいパートが指定されると、一人一人が作業用の VTR から動きを覚えます。VTR・映写機の数の関係で、直接、体で覚えるだけの時間がないのでノートに書き込んでいきます。

そのあと、実際に体に動きを移し入れ、必要に合わせて VTR に戻って、音楽との関わり、他の人たちとの関わり、小道具の使い方などを確認し、スタジオに入って実際に踊りこみをしなが、通し稽古に備えるといった方法です。

(2) 体験事例 I ~ Martha が魂で踊って伝えてく

れた作品の根元～

レパトリー作品 [Errand Into The Maze] (初演：Feb.28.1947) での体験に移ります。

この作品が私に課せられました。3段階での恐怖と葛藤に打ち勝って自由を獲得するという、デュエットですが、女性中心の踊りです。男性は、恐怖のシンボルとして獣のような姿で、途中3回登場し、負けては退場します。20分の短い作品ですが、体力を使う苦しそうな印象だけが強く、その割に客席の反応も冴えないので、できたら素通りしたい作品でした。

どの様にこのパートをこなせるか見当もつかないまま、とにかく、動きをノートに取り、動きの一部となる長いロープを操る作業を確認し、実際にロープを使って表現の感触を体に叩き込みます。

サア、これから動きに取り掛かろうと思っていた矢先に「今からリハーサルするよ」と Martha が言います。仰天した私は「まだ動きは覚え切れていないから踊れない」と必死で断ろうとすると、Martha は「そういう時が最高の状態だ。私が話し掛けるから大丈夫。」そうしてスタジオに引っ張りだされました。スタジオには若いダンサーたちが壁に沿ってズラリと座り、Martha はゆっくりと正面センターの椅子に腰掛けます。

この様な状態でのオープン・リハーサルなど前代未聞です。皆の前で恥をかく恨めしさと、作品が掴み切れていない不安と、男性とのリフトの段取りもしていない不安などが入り乱れ、無感覚状態になっていく自分を感じながらセットやロープをセッティングし、Martha に一礼をして「板付け」の位置に立ちました。その瞬間、猛烈な孤独感に襲われました。

周りにはこんなに人が居るのに、誰にも頼れない、逃げ出すことも出来ない、独りで挑むしかないと感じました。

今、振り返ると、その状況からすでに作品への誘導は、始まっていたのだと思います。

音楽が始まり、Martha の話し掛けに誘導されながら動き出します。「話し掛け」は、

- ・ (e.g.) errified, but you must touch !
- ・ (e.g.) he's coming, closer, closer, He'll get you!
- ・ (e.g.) You, got to do it ! Face him !
- ・ (e.g.) shout of triumph, Move proudly……

などのように続きます。そんな中で、「あの動きだ」「この動きはそんな感じから生まれたのか」「ここ

はそんな感じで溜め込むのか」「爆発するのか」と夢中で動き続けました。

そうして終結に入る寸前、フット戸惑いが横切りました。理由は、最終的に恐怖を征服した直後の動き方です。もし、自分だったらその瞬間、体の力を抜き切って、新しいエネルギーが満ちてくるのを待ってから動きだして終了に持っていきたい。そのためには、これまでの動きを幾つかカットしないと間に合わない。つまり、作舞者を前に勝手に動きを変える、失礼なことになるのでためらいましたが、「御免なさい、私はこうしか動けない」と内心謝りながら動き通しました。終わってから Martha も私も放心状態でしたが、「ああ、そんな終わり方もあるね」と許してくれました。

このリハーサルは、Martha 自身が魂で踊って見せて下さったように思います。「話し掛ける」ことを通して、新しい表現体に、この作品の根元から揺さぶると共に、演じることへの心構えを伝えられたように感じました。

(3) 新作づくりでの日々の開始状況

それでは、新しい作品を創り上げる過程での体験に移ります。

通常、新作リハーサルの場合は、それに呼ばれたダンサーはウォーム・アップをしながら、ある種の緊張感を漂わせて、ザワザワとリハーサルの始まりを待ちます。このザワザワした雰囲気づくりは、Martha を迎える私たちの細やかな心配りの現われなのです。

新作は、ある形ができるまで、Martha も私たちも極度に緊張しています。その緊張が不機嫌な Martha を作りだすことも度々なので、私たちの世代で考えついたことは、じっと静まり返って待つよりは、ザワザワとスタジオ一杯にそれぞれ動きながら Martha を迎えようと決めたのです。

その様な動いた空気の中で、ある時は、Martha の話しから始まります。話の内容は、身近な出来事だったり、新作に関わる事柄などが脈絡もなく飛び交います。私たちダンサーは、新作に関わるアイデアやイメージなどを拾い集めることに意識を集中します。と、言うのは、一切、作品内容は説明されないからです。リハーサルが進むにつれて、それぞれが復習をしたり、動きの調整をしたり、グループなら動きのタイミングを打ち合わせたりして準備をしながら、一気に Martha を動きの渦の中に巻き込んでしまうこともあります。

こうお話していると、毎回のリハーサルが凝みなく前進しているような印象ですが、実際は、積んだり崩したりは毎日・毎晩のように2～3ヶ月繰り返されます。

日数が重なるにつれ、ダンサー側は毎回のリハーサルで変わったことを覚え直す作業に追われるわけですが、当然、記憶力も体力も落ち、混乱

をきたします。どんなに疲れていても、手を抜いて動くことはありませんし、また、許されません。それはダンサーという独立した職業でということもありますが、それ以上に、精一杯動くことの中で動きと体のハーモニーを見つけながら、適切な表現感を筋肉を通して掴もうとするダンス特有の姿だと考えます。

(4) 体験実例Ⅱ～私の姿勢を変えた、ある新作リハーサルの初日～

[Ecuatorial] 初演：Jun.27.1978

私がある一つの貴重な、そして苦い体験を境に Martha に向き合う自分自身の姿勢を改めて自覚し、変えることになった作品 [Ecuatorial] での出来事をお話いたします。

それまでの新作でも大抵の場合、私が貰う指示は、具体的な動きではなく、Martha の "GO", "MOVE", "and YOU", "GO ON!" などのサインだけで動き、O.K. ならそれを整理し、固めていました。O.K. でないときは、何度も動き直しをしながら、要求されていることを探り取るといった具合です。

新作はデュエットと言われただけでパートナーの男性とスタジオに集合しました。

その初日のリハーサルで、二人のスタートの位置が指定され、Martha は、男性との振り付けを開始します。暫くすると、"Reaction & MOVE" と私を指差します。ハッとした私は「どんな感じ?」「私は何? 誰?」と尋ねてしまいました。すると Martha は、毅然として「質問するな!」「私にだって説明できない!」「私は後ろの方から来る声を聴きながらやっているのだから! ゴチャゴチャ質問されると消されてしまう!」と恐ろしい剣幕で怒鳴り返されました。

Martha の立場から推し量ると、「今必要なのは、表現すべき体であって、お前ではない」と棒立ちになって質問する肉体に向かって投げられた言葉だったろうと思われま。

恥ずかしい行動をとってしまった後悔と、手掛かりもなく、どう動けるのかと正直腹も立ちました。「手掛かりがない」と思ったことは言い訳でしかなかったのです。Martha が男性に振付けているところに「手がかりはあった」筈なのです。それをうっかり見落として「どんな作品にしたいのか」と考え続けていたので、いつものサインを言葉としてしか受け取れず、咄嗟に言葉で反応してしまったと思います。

この出来事を通して、理由は何であれ、作舞者 Martha の「イメージ」に立ち会っているのが表現体の役割であることを、新たに心に刻みました。

この場合の「イメージ」の意味は、Martha の頭の中にあるイメージではなく、言葉で伝えられるイメージでもない、実際の動きの中に埋め込む情

感を、表現体を感じ取ることです。

3 まとめ

表現体として、感じるままに動くということは、常に、自分の筋肉をイメージに添わせられるようにトレーニングしておくことで、これは勝手気ままに動くこととは異なります。

Martha とのコミュニケーションは、Martha が出すサインの「在り方」を見分け、感じ取って、動きながら答えを出していくことでした。

そういった私たちが動く動きの中で、Martha はイメージと交流を持ち、私たちはそのイメージと関わりあう、という作業の積み重ねで新作は生まれて行きました。

4 おわりに

表現体としての体験をかえりみながら、大まかに話してまいりました。

おわりに、この機会を頂いて、偉大なアーティスト Martha Graham と、少しの間でも共に歩けた幸せを改めて感謝しつつ、また、本日の参加に関して、勇気とアドバイスをいただいた松本千代栄先生に心から感謝を申し上げ、終わらせていただきます。

ありがとうございました。